

原 著

## 孫と祖父母の関係に関する研究

小 川 隆 章\*

### A STUDY OF GRANDCHILDREN'S RELATIONSHIPS WITH THEIR GRANDPARENTS

Taka-aki OGAWA\*

Questionnaires were administered to college students and elementary school (5th & 6th grade) children. They answered about their perceptions of the relationships with their own living and dead grandparents. The analysis of their responses showed following main results.

(1) College students had less frequent interactions with their grandparents and lower attachment to them than elementary school children had.

(2) Neither the geographical distance between grandchildren and their grandparents nor the frequency of their interactions was correlated with grandchildren's levels of attachment to their grandparents.

(3) When grandchildren perceived good relations between their mothers and their paternal grandparents living in same households they liked paternal grandmothers more than other grandchildren who perceived bad relations between them.

(4) College students had uncomfortable experiences with their grandparents especially when they lived together in same homes.

(5) Among five styles of grandparenting named by Neugarten & Weinstein, The Formal, Fun-Seeking and Parent-Surrogate were positively evaluated while Patriarchal and Distant-Figure were negatively evaluated by college students.

(6) College students who liked and respected much their grandparents tended to hope to live together with their own parents after their marriage in future.

#### 問 題

幼稚園児や小学校低学年児童などはよく「昨日はお祖父ちゃんと～した」とか「今日はお祖母ちゃんと〇〇へおでかけするんだ」などと楽しそうに話している。また、小学生に悩みの調査をした結果では、悩みの相談相手として父母や友だちとともに祖父母が挙げられること

が少なくなかった(浅倉 1992)。ファーマンら(Furman & Buhrmester 1985)は小学校5, 6年生を取り巻く人間関係を幾つかの側面から調査し、祖父母が父母、兄弟、友人とともに重要であることを記している。一方、祖父母にとっても、孫は子よりもさらに可愛いといわれることが多い。都内在住の65歳以上の高齢者に「この一年間でどのようなことが嬉しかったか」を尋ねたと

\* 北海道教育大学釧路校  
Hokkaido University of Education at Kushiro

ころ、孫の誕生とか入学という回答が男女とも少なくなかった(那須 1967)。現在、我が国は世界一の長寿国となり、また少子化が進んできた。一人の高齢者の持つ子どもと孫の人数が少なく、また孫やときには曾孫がかなりの年齢になるまで、接触が可能となってきた(注1)。祖父母と孫の関係が両者にとって以前に増して重要になってきているのではないだろうか。ところで、実証的研究を見ていくと、家政学、社会学、老年学からの研究はかなり有るが、心理学からの研究は少ないようである。田中ら(1987)は、大学生を対象に別居している祖父母との訪問、電話、手紙、贈り物等の交流の実態とそれに影響する要因として所要時間(最も大きな要因がこれであった)、性別(女孫の方がやや祖父母との交流が多い)、祖父母の居住形態(祖父母のみで生活している場合の方が交流が多い)、続柄(父方、母方の別)、孫の居住地などについて検討した。船越・深谷(1990)は、小学校4~6年生とその母親に質問紙調査を行った。子どもの祖父イメージと男性高齢者イメージ、祖母イメージと女性高齢者イメージは関連していた。また、子どもの愛着は祖父よりも祖母、父方よりも母方祖父母に対しての方が強かった。女兒の方が男児よりもやや強い愛着を示した。祖父母と同居している孫は同居できて良かったと回答している者が大部分であった。彼らは孫と祖父母の同居、近居、遠居などの違いについては検討していない。石黒ら(1991)は、中学生と大学生に質問紙調査を行い、祖父母との同居・別居している理由、心のつながり、祖父母のイメージについて回答を得た。ここでは、祖父母との同居・別居、続柄、祖父母と両親との関係などが祖父母と孫の関係に及ぼす影響が有るかどうかについて検討していなかった。

海外の研究に目を向けると、1つの特徴としては大学生を調査対象として彼らの祖父母との関係を研究したものが多くことである(Hoffman 1979-80, Hartshorne & Manaster 1982, Matthews & Sprey 1985, Eisenberg 1988, Kennedy 1989, 1990, 1991, 1992, Creasey & Koblewski 1991, Hodgson 1992)。もう1つは、祖父母を対象としたものが多くことである(Neugarten & Weinstein 1964, Hader 1965, Updegraff 1968, Kahana & Kahana 1971, Robertson 1976, Clavan 1978, Ahrons & Bowman 1982, Johnson 1983, Kivnick

1983, Strom & Strom 1983, Kivett 1985, Bengtson & Robertson 1985, Strom & Strom 1988, Link 1989, Robinson 1989, Thomas 1989, 1990, Roberto 1990, Gee 1991, Smith 1991, Roberto 1992)。まず前者の大学生を調査対象とした諸研究では、各研究者とも大学生たちが現在もお祖父母との暖かい関係を保持し、彼らの人生において祖父母が重要な位置にあることを強調している。しかし、これらの諸研究では、幼い時期と大学生くらいの年齢段階とを比較したものが少ない。その中でただ1つ、マッシュューズら(Matthews & Sprey 1985)は、大学生132人に質問紙調査を行い、現在の祖父母との関係とともに子どもの頃の祖父母との関係について回答を求め、子どもの頃、良好な関係だった者は現在でも良い関係であることを報告している。本研究では、これを参考にして大学生に現在と子どもの頃の祖父母との関係について回答を求めるとともに、小学生にも質問紙調査を行い、祖父母と孫の関係について年齢段階の違いによる差異について検討してみたい。次に、後者の祖父母を対象とした研究の中で古典的ともいえるニューガートンら(Neugarten & Weinstein 1964)は、祖父母に面接調査を行い、彼らの孫との接触(これを英語で grandparenting と呼んでいる。祖父母行動とでも訳すべきかと思われる)のタイプあるいはスタイルを5個設定して、各祖父母をそのうちのどれかに分類した。いま、その5つのタイプというのを要約して挙げると、次のようなものである。

(1) 父母と祖父母の役割をはっきり区別して、孫に関心を持つが、責任は父母にまかせる(フォーマル)(注2)

(2) 孫を遊び仲間と考える。孫をととても可愛がり、その成長を楽しむ。孫に対して権威が無い(遊び相手)

(3) 父母が働いている時やいない時に子どもの世話を代理にする人(親代わり)

(4) 祖父母が特別な技能、財産などを持ったりして家父長的である。両親もこれに従い、孫に対してもたまに口を出す(家父長的)

(5) 祖父母と孫は離れて住んでいて、時々接触するのみ。遠い存在である(遠い存在)

この研究では、各祖父母をどれか1つのタイプに当てはめ、1個人が複数のタイプに分類されることはないの

(注1) 曾祖母と曾孫についてウェントウスキー(Wentowski 1985)が研究を行い、バートンら(Burton & Bengtson 1985)も曾祖母の面接調査を報告している。

(注2) 村井(1981)はこれを正常型と訳しているが、これではあたかもこのタイプが正しいタイプであって、他のタイプは正常ではない片寄ったタイプであるかのような印象を与えるので、本研究では無理に訳さないでフォーマルとしておくことにする。

で、最も顕著な個人的特徴で分類され、副次的に他の特徴を有していても結果的に無視されることになる。(8)の「親代わり」は祖母のみにみられ、祖父には皆無という結果であるが、しかし祖父にも、孫との接触の中で「親代わり」の要素をその役割行動に含んでいることが多いのではないかと。事実、その後の2つの研究でこの点があきらかになっている。クローフォード (Crawford 1981) は、最初の孫が生まれる前後の祖父母にニューガーテンらと少し異なる5個のタイプの祖父母の型を表わす文章を見せ、それに対する賛否を回答してもらった。したがって、この結果では複数のタイプに該当する祖父母の方がむしろ多くなっている。またマシューズら (Matthews & Sprey 1984) は、離婚した子どもを持つ祖父母と子どもが一人も離婚していない祖父母に面接調査して、ここでも祖父母自身に5個のタイプを提示して選択させたところ、複数のタイプを選ぶ祖父母が少なくなかった。「親代わり」を単独あるいは他と組み合わせて選んだ祖父母13人のうち12人が離婚した子どもがいた(したがって片親家庭の孫がいた)。ところで、ニューガーテンらとそれに関する研究を見てみると、彼らの分類を用いて、孫から見て、祖父母とのどのような接触を望んでいるかの資料を得ることが出来るのではないかという気がする。孫に5個の祖父母のタイプを見せて、彼らの実の祖父母がどれくらいそれに当てはまるかを評定してもらい、その結果が他のどのような変数と関連しているかを検討してみたい。たとえば、孫からの愛着や尊敬とプラスの関係があるものと反対にマイナスの関係があるものを見出し、孫の望む接触のスタイルについての資料とすることができないだろうか。

なお、米国などでは、老夫婦が結婚している子ども夫婦と同居することは少なく、独身でいる子どもと同居することはあっても、通常は老夫婦だけで生活することが多いのに対して、我が国では結婚して子ども(老夫婦にとっては孫)のいる子どもと同居する機会が多い(望月1988, 志賀1992)。親に対するアンケート調査では、かなりの親が老後を子どもとその家族との同居を望んでいる(総理府広報室1982, 総務庁青少年対策本部1987)。孫は、祖父母との関係が良好である場合、自分が年老いた両親と同居することに積極的な傾向を持つというような関連はないのであろうか。

本研究では、大学生に質問紙調査を行い、また副次的に小学生にも簡単な調査を行い、次の事項について検討したい。

(1) 大学生の現在と子どもの頃の祖父母との関係の比較

(2) 大学生と小学生の祖父母との関係の比較

(3) 大学生にはニューガーテンらの立てた5個の祖父母のスタイルに自分の祖父母がどれくらい当てはまるかを評定を求め、その評定値が祖父母に対する愛着・尊敬やそのほかの変数とどのように関連しているか。

(4) 大学生の祖父母との関係と彼らの自分の結婚後の両親との同居の希望と関連があるかどうか。

## 方 法

三重県内の2校の大学生330名(男子123名, 女子206名, 性別無記入者1名)と同地の2校の小学5, 6年生(男子139名, 女子114名)に質問紙調査を行った。現在、祖父母がいる(生きている)者は、

父方祖父	小学生	48.6%	大学生	26.4%
父方祖母		80.6%		58.8%
母方祖父		63.2%		36.2%
母方祖母		82.6%		73.3%

であった。父方祖父母あるいはそのうちの片方と同居している者は小学生では29.2%, 大学生では帰省先で同居している者を含めると25.76%, 母方祖父母あるいはその片方と同居しているものは小学生では12.6%, 大学生ではやはり帰省先での同居を含めると5.1%であった。

## 結 果

### 1. 祖父母との接触の程度

小学生と大学生の回答した父方および母方祖父母と同居していない者の接触(会ったり、電話するなどの)頻度は(比率は非該当者を除いた数値である)、

#### a. 父方祖父母と

- |                 |     |             |     |             |
|-----------------|-----|-------------|-----|-------------|
| (1) 毎週のように      | 小学生 | 43人 (32.1%) | 大学生 | 10人 (6.9%)  |
| (2) 月に何度か       | 小学生 | 42人 (31.3%) | 大学生 | 17人 (1.7%)  |
| (3) 一年に何度か      | 小学生 | 25人 (18.7%) | 大学生 | 75人 (51.7%) |
| (4) ほとんど会ったりしない | 小学生 | 22人 (16.4%) | 大学生 | 34人 (23.4%) |
| (5) 無答          | 小学生 | 2人 (1.5%)   | 大学生 | 9人 (6.2%)   |

#### b. 母方祖父母と

- |            |     |             |     |             |
|------------|-----|-------------|-----|-------------|
| (1) 毎週のように | 小学生 | 52人 (26.1%) | 大学生 | 23人 (9.5%)  |
| (2) 月に何度か  | 小学生 | 74人 (37.2%) | 大学生 | 75人 (31.1%) |
| (3) 一年に何度か |     |             |     |             |

小学生 54人 (27.1%) 大学生106人 (44.0%)

(4) ほとんど会ったりしない

小学生 18人 ( 9.1%) 大学生 28人 (11.6%)

(5) 無答

小学生 1人 ( 0.5%) 大学生 9人 ( 2.7%)

という集計結果となった。大学生の方が一貫して接触が少ない。後者では、父方祖父母と母方祖父母との接触の頻度を比較すると、父方よりも母方祖父母との接触の方が有意に多かった。次にもう1つ、小学生、大学生共通に質問した項目として、悩みごとが有ったら相談するかどうかをたずねた。これは各祖父母ごとに、同居・別居にかかわらず、祖父母が生存の者全員のうち「よく(相談)する」および「時々する」と回答した者の人数と比率を挙げると、

a. 父方祖父

小学生 25人 (19.4%) 大学生 8人 ( 8.2%)

b. 父方祖母

小学生 54人 (26.2%) 大学生 23人 (11.2%)

c. 母方祖父

小学生 32人 (19.2%) 大学生 15人 (11.5%)

d. 母方祖母

小学生 54人 (21.3%) 大学生 35人 (14.1%)

となり、ここでも一貫して小学生の方が祖父母を相談相

手とすることが多い結果である。小学生も大学生も男子よりも女子の方がやや多いようにみえたが、統計的な差はなかった。

## 2. 祖父母に対する愛着

4人の祖父母をどれくらい好きかについての回答をまとめると表1および表2となった。ここではすでになくなっていく祖父母についても回答してもらった。「知らない」というのは幼い頃なくなったので、覚えていなくて答えられないというもののほか、現在まだ健在であるけれども、極端に接触がすくなく、よくわからないというケースも含まれている。本研究では回答者の家庭の状況について、実の両親がそろっているか、片親家庭か、継父・継母がいるか、というような点については把握していなかった。米国では離婚家庭が多く、祖父母から見て実の子が孫を引き取った場合は祖父母との接触が離婚前より増加するが、配偶者の方が孫を引き取った場合は祖父母と孫の接触は極端に減少することが指摘されている (Ahrons & Bowman 1982, Matthews & Sprey 1984, Kennedy 1990)。わが国においては、離婚した夫婦のうち片方が子どもを引き取ると、他方の親は全く子どもに接触できなくなる場合が多いので、祖父母も孫との接触が無くなるであろう。表1、2に見るように、4種の祖父母とも小学生の方が大学生よりも愛着の程度が

表 1 祖父母への愛着の程度 小学生

	父方祖父	父方祖母	母方祖父	母方祖母
1. とても好き	103 (40.7%)	138 (54.5%)	140 (55.3%)	171 (67.6%)
2. わりと好き	34 (13.4%)	41 (16.2%)	37 (14.6%)	38 (15.0%)
3. 半分半分	36 (14.2%)	31 (12.3%)	24 ( 9.5%)	20 ( 7.9%)
4. 少し嫌い	5 ( 2.0%)	7 ( 2.8%)	2 ( 0.8%)	2 ( 0.8%)
5. 嫌い	1 ( 0.4%)	3 ( 1.2%)	1 ( 0.4%)	3 ( 1.2%)
6. 知らない	73 (28.9%)	32 (12.6%)	48 (19.0%)	18 ( 7.1%)
7. 無答	1 ( 0.4%)	1 ( 0.4%)	1 ( 0.4%)	1 ( 0.4%)
合 計	253 (100%)	253 (100%)	253 (100%)	253 (100%)

表 2 祖父母への愛着の程度 大学生

	父方祖父	父方祖母	母方祖父	母方祖母
1. とても好き	86 (26.1%)	99 (30.0%)	101 (30.6%)	158 (47.9%)
2. わりと好き	61 (18.5%)	86 (26.1%)	74 (22.4%)	100 (30.3%)
3. 半分半分	43 (13.0%)	72 (21.8%)	34 (10.3%)	34 (10.3%)
4. 少し嫌い	7 ( 2.1%)	10 ( 3.0%)	4 ( 1.2%)	4 ( 1.2%)
5. 嫌い	9 ( 2.7%)	16 ( 4.8%)	2 ( 0.6%)	2 ( 0.6%)
6. 知らない	124 (37.6%)	47 (14.2%)	112 (33.9%)	29 ( 8.8%)
7. 無答	0	0	3 ( 0.9%)	3 ( 0.9%)
合 計	330 (100%)	330 (100%)	330 (100%)	330 (100%)

表 3 父方祖母への愛着 大学生の子どもの時と現在 (祖母生存の者のみ)

現 在	小学生の頃					計
	とても	わりと	半々	少し嫌い	嫌 い	
1. とても	48人	13人	0人	0人	0人	61人
2. わりと	18	42	2	1	0	63
3. 半分半分	1	16	23	2	1	43
4. 少し嫌い	0	2	1	2	2	7
5. 嫌い	1	3	1	2	6	13
計	68	76	27	7	9	187

$$\chi^2=208.21, df=16, p<.001$$

高い。また、大学生のうち、現在、祖父母が生存の者のみについて、小学生の時と現在の愛着の程度を比較すると、4種の祖父母のいずれについても現在の方がはっきりと低かった。父方祖母について表3に示した。この表の187人中、2つの時期で同程度の者が121人、現在の方が愛着の程度が高い者21人、逆に低い者45人であるので、全体では現在の方が有意に低い結果である ( $\chi^2=8.73, p<.01$ )。また、この表に見るように、マシューズら (1985) とおなじく、2つの時期の愛着の程度は関連している。他の3種の祖父母についてもこのことは共通していた。

前述の船越らの結果と同じく、米国でも父方祖父母よりも母方祖父母と、そして祖父よりも祖母と孫との接触が多く、また心理的親密さが高いことを示す研究結果が多い (Hoffman 1979-80, Hartshorne & Manaster 1982, Eisenberg 1988, Kennedy 1991, Creasey & Koblewsky 1991, Hodgson 1992)。本研究の資料でこの点を検討してみると、まず小学生では、母方祖母の方が父方祖母よりも、そして母方祖父の方が父方祖父より好かれていた。また母方の祖父と祖母の比較では、祖母の方が孫から顕著に好かれていた。大学生では父方母方ともに祖父よりも祖母に対する愛着の方が高かった。その他の差については、差の方向は前述の諸研究の結果と同じであるが、有意ではなかった。また祖父母に対する愛着の男女差についてもやや女子の方が高いように見えるが、小学生・大学生ともに統計的に有意ではなかった (注3)。なお、ここで注目すべき結果は、各祖父母の死

亡している者と生存している者に2分して愛着について比較すると、小学生では差がないが、大学生では一貫して死亡している祖父母に対する愛着の程度が生存している祖父母に対する愛着よりもやや高いことである。父方祖父のみについて統計的に有意であるが、他の3人の祖父母についても差の方向が一致していた。死亡している場合は「知らない」が多いけれども、これを除き比較すると、生存している場合よりも全体に好意的に評定されていた。祖父母との関係が過去のことになった場合は良いことが印象強く残るのに対して、引き続き接触が有る場合は後述の「いやに思う」経験が有ることから、その分が割り引かれて評定されるのであろうか。この他に祖父母に対する愛着に関連する要因として孫から見た母親と祖父母との仲の良さを取り上げてみた。表4および表5は小学生・大学生ともに父方祖父母と同居している家庭で、祖父母と母親が仲が良いことと祖母に対する愛着の程度に関連が見られた。祖父に対する愛着については関係がなかった。このことは嫁と舅とよりも嫁と姑との関係が家族関係にとってより重要であることを示しているといえようか。また人数は少ないが、母方祖父母と同居している者で、母親と祖父母の仲の良さとも祖父母に対する愛着の評定値をクロス集計してみたが、こちらの方は関連が見られなかった。母親とその実の親の場合は仲が悪いといっても、孫が嫌な思いをするほどではないからではないだろうか。事実、母方祖父母と母親の関係は孫の目からみたところでは「あまり良くない」が皆無であった。

(注3) 多くの研究で父方祖父母より母方祖父母、祖父よりも祖母が孫から好かれ、相談相手になったりする傾向があることを示しているが、一部にはそのような傾向を見出さなかった研究報告もある。しかし、逆の傾向を報告した研究結果は皆無である。したがって、本研究の結果は内外の先行の諸研究と類似した結果といつてよいだろう。また、上記の傾向の原因としては、“kin-keeper”として女性が異世代間の交流と接触を促進する役割を持つことを挙げる者が多く (Hoffman 1979-80, Eisenberg 1988, Hodgson 1992, Kivett 1991等)、他には母方祖父母の方が若いことが多い (Hoffman 1979, Hartshorne & Manaster 1982)、祖母が息子の子どもよりも娘の子どもを好む (Fischer 1983)、などが挙げられている。

表 4 同居する父方祖父母と母親との関係と祖母への愛着 (小学生)

祖父母と母の関係	父方祖母への愛着				
	とても	わりと	半々	少し嫌い	嫌い
1. 良い	27人	6人	2人	0人	0人
2. わりと良い	12	10	3	2	0
3. あまり良くない	1	0	5	0	1
合計	40	16	10	2	1

$\chi^2=39.48$ ,  $df=8$ ,  $p<.001$

表 5 同居する父方祖母と母親との関係と祖母への愛着 (大学生)

祖父母と母の関係	父方祖母への愛着				
	とても	わりと	半々	少し嫌い	嫌い
1. 良い	10人	7人	1人	1人	0人
2. わりと良い	7	14	10	1	1
3. あまり良くない	3	4	3	4	5
合計	20	25	14	6	6

$\chi^2=26.13$ ,  $df=8$ ,  $p<.001$

なお、別の質問で、各自の4人の祖父母の中で一番好きな祖父母は誰であるか回答を求めたところ、小学生と大学生の選択率は、

1. 父方祖父  
小学生 10.1% (8.3%) 大学生 12.1% (16.7%)
2. 父方祖母  
小学生 24.3% (24.8%) 大学生 16.1% (18.9%)
3. 母方祖父  
小学生 15.5% (17.5%) 大学生 12.1% (12.9%)
4. 母方祖母  
小学生 27.7% (27.0%) 大学生 43.3% (36.4%)
5. 決められない  
小学生 21.6% (22.6%) 大学生 13.5% (15.5%)
6. 兼答  
小学生 0.7% 大学生 3.3%

となった。「決められない」は選択肢としては用意していなかったのであるが、複数の祖父母を同じ程度に好きなので、一人に絞れない、というものである。また、カッコ内は表1および表2に集計した回答の中で、自分の4人の祖父母のいずれについても「知らない」と回答していない者、小学生137名、大学生132名のみで集計した

数値である (本研究では生存している祖父母だけでなく、亡くなった祖父母をも含めて回答してもらったので、4人の祖父母の生存率の違いの影響は直接的にはないけれども、早く亡くなったり、あるいは事情があつて健在だけでも、接触が無いため、「知らない」と回答している者の比率が4人の祖父母で顕著な差があつた。その影響を排除した数値である)。4人の祖父母の中で最も多く選ばれているのは母方祖母であつた。カハナら (Kahana & Kahana 1970) の調査した小学生、バティストリら (Batistelli & Farneti 1991) の調査した9, 12, 17歳の者たち、ケネディ (Kennedy 1990) およびホジソン (Hodgson 1992) の研究した大学生たちも一貫して最も好きな祖父母として母方祖母を最も多くあげている (注4)。

### 3. 祖父母に対する尊敬

大学生のみ祖父母に対する尊敬の程度について回答を求めた。4人の祖父母についての集計結果は表6である。愛着の場合と異なり、死亡している祖父母の方が高いということではなかつた。クロス集計の結果、「知らない」を除くと、父方祖父と父方祖母では祖父の方が孫からの尊敬度が高かつた。しかし、母方の祖父と祖母の比

(注4) 後述のように、本研究では大学生のみ祖父母に対する「いやに思う」経験を調査した。小学生については調査していないが、おそらく大学生の方が多いただろう。大学生のこの経験は母方よりも父方祖父母に対しての方が多。小学生よりも大学生の方が1人に絞って最も好きな祖父母を選ばせると、母方祖母に選択が集中することの1つの原因がここにあるように思われる。

表 6 祖父母を尊敬する程度

	父方祖父	父方祖母	母方祖父	母方祖母
1. 尊敬している	121 (36.7%)	110 (33.3%)	130 (39.4%)	154 (46.7%)
2. 少し尊敬している	65 (19.7%)	80 (24.2%)	58 (17.6%)	85 (25.8%)
3. あまり尊敬しない	44 (13.3%)	69 (20.9%)	44 (13.3%)	50 (15.2%)
4. 尊敬しない	26 ( 7.9%)	35 (10.6%)	13 ( 3.9%)	11 ( 3.3%)
5. 知らない, わからない	70 (21.2%)	32 ( 9.7%)	76 (23.0%)	26 ( 7.9%)
6. 無答	4 ( 1.2%)	4 ( 1.2%)	9 ( 2.7%)	4 ( 1.2%)

表 7 祖父母をいやに思うことの有無

	父方祖父母	母方祖父母
1. よくある	41 (12.4%)	6 ( 1.8%)
2. たまにある	124 (37.6%)	67 (20.3%)
3. あまりない	97 (29.4%)	141 (42.7%)
4. ない	40 (12.1%)	86 (26.1%)
5. 無答	28 ( 8.5%)	30 ( 9.1%)
合計	330 (100%)	330 (100%)

較では有意ではないが、祖母の方がむしろやや高かった。また、父方と母方の祖父同士は差がないが、祖母のうちでは母方祖母の方が尊敬度が高かった。尊敬する理由として多くの回答者により挙げられているのは、

\*大変苦労している

\*よく働く

\*年をとっても元気であるから

\*私を大事にしてくれたから

\*今の自分があるのは祖父母のおかげだから

\*自分が尊敬する両親の父母だから

\*今までの生き方を尊敬するから

\*祖父母が互いに助け合って生きているから

\*立派な功績を持つ

\*色々知識を持っている

\*性格が良いから

\*趣味・生き甲斐を持っているから

\*気が若かったりして話が合う

\*年を取っている人は尊敬に値するから  
などであった。

4. 祖父母に対する「いやに思うこと」

これも大学生についてのみである。父方祖父母、母方祖父母に対して「いやだと思ったことはありますか」と尋ね、4段階で回答を求めた。表7がその結果である。無答を除き検定すると、父方祖父母に対する「いやに思うこと」が多かった。ただし、この「いやに思うこと」は祖父母の居住地と関係があった。表8は父方祖父母の居住地とのクロス集計結果である。同居の場合が顕著に多い。同居と「歩いて10分以内」に住む祖父母については「ない」の回答は皆無である。住居の近さと接触の頻度とは密接な関連があったので、やはり接触が多いと祖父母との楽しい経験ばかりでなく、不快な経験が生ずる可能性が高くなるといえそうである。いやに思ったことの内容として挙げられているものは、

\*干渉しすぎるとき (口うるさい)

\*母親の悪口をいう (いじめる)

\*頑固である

\*わがまま, 自分勝手

\*人間的に問題がある

\*不潔なとき

\*心配症

\*何度も言わないと理解してもらえないとき

\*他の孫と比較するとき

表 8 父方祖父母の居住地と「いやに思う」程度

	よくある	たまに	あまりない	な	い
1. 同居	20人	54人	12人		0人
2. 歩いて10分以内	1	9	3		0
3. 乗り物で30分以内	1	9	13		7
4. 乗り物で2時間以内	9	8	21		6
5. 乗り物で2時間以上	3	10	14		13

$\chi^2=72.71$ ,  $df=12$ ,  $p<.001$

表 9 祖父母の5つのタイプに「当てはまる」の回答の比率

	父方祖父	父方祖母	母方祖父	母方祖母
1. フォーマル	33.3%	36.4%	33.0%	41.5%
2. 遊び相手	13.6	16.7	15.8	25.8
3. 親代わり	10.6	27.3	11.8	30.6
4. 家父長的	5.2	3.0	4.5	2.1
5. 遠い存在	11.5	16.7	10.3	12.1

表 10 母親の仕事と父方祖母の(3)「親代わり」の評定

母親の仕事	父方祖母の(3)の評定			合 計
	当てはまる	やや当てはまる	当てはまらない	
1. 毎日くらい出勤	51人	28人	49人	128人
2. 自営業	12	16	18	46
3. 時々出勤	4	4	13	21
4. 専業主婦	23	27	73	123
合計	90	75	153	318

$$\chi^2=21.08, df=6, p<.01$$

\*病気の姿, 病気の世話をしたとき

\*ひとの悪口を他人にいう

\*金銭面でもめたとき

などがあった。なお、父方祖父母と母方祖父母のどちらも同居していない者のみで比較してみたところ、上と同じく、父方祖父母に対しての方がいやに思うことが有意に多かった。

#### 5. 孫から見た祖父母のタイプの評定

大学生の各自の4人の祖父母について、ニューグーターンらの設定した5つのタイプに「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あてはまらない」の3段階で評定することを求めた。表9はそのうち各タイプに「あてはまる」と回答した者の比率である。ニューグーターンらと同じく、「フォーマル」が最も多く、「家父長的」が最も少なかった。「親代わり」は祖父よりも有意に祖母に多いが祖父にも見られること、および「遊び相手」が祖父よりも祖母の方が有意に多いことの2点が彼らと違う結果である。

次に、これらの評定値と他の質問項目の回答との関連をみた。まず孫から見て、これらのどのタイプの祖父母が好かれるのか。愛着との関連を見ると、「フォーマル」、「遊び相手」、「親代わり」は愛着の程度とプラスの関連、「家父長的」と「遠い存在」はマイナスの関連が有意であった。尊敬の程度との関連は、「フォーマル」および「親代わり」がプラスの関連、「遠い存在」とはマイナスの関

連がみられた。居住地の近さと「親代わり」はプラスの、「遠い存在」はマイナスの有意な関連があった。表10は母親の仕事と父方祖母の「親代わり」に当てはまる程度とが関連があることを示している。ところで、ニューグーターンらは、祖父母に対する面接調査により各祖父母を5つのタイプのうちのどれかに分類したのであるから、1人の祖父または祖母が重複して複数のタイプに分類されることはなかった。本研究では、1人の祖父・祖母が複数のタイプに「あてはまる」と評定されることが可能であった。この評定値の重なり具合をみみると、4人の祖父母で多少違いがあるものの、共通して、「フォーマル」と「遊び相手」が一番重複していることが多く、次にこの2つと「親代わり」が重複して「あてはまる」とされることが多かった。「遠い存在」は「フォーマル」と重複評定を多く受け、その他のタイプと重なることは少なかった。「家父長的」は他のタイプと重なることが最も少なく、1つだけ孤立しているように見えた。次に、これらの評定値を1, 2, 3という数値に変換して相互関係を相関係数として算出してみたところ、クロス集計の結果と同様な結果であるが、つけ加えることとして、「遠い存在」は「親代わり」との間に最も大きい負の相関があり、またこの「親代わり」と「家父長的」の間に有意な正の相関があった。「親代わり」が孫との関わり具合が最も深く、その対極に位置しているのが「遠い存在」であると解釈できよう。また「家父長的」も孫

表 11 祖父母に対する尊敬度の高さと将来の自分の父母との同居希望の関係

両親との同居	尊敬度の高い者	その他の者	合計
1. したい	38人	76人	114人
2. あまりしたくない	26	127	153
3. したくない	2	44	46
合計	66	247	313

$$\chi^2=19.56, df=2, p<.001$$

の生活に関与することの大きいことで似ているのではないかと思われる。

6. 両親との同居の希望の程度とそれに関係する要因  
質問項目 No. 61は「あなたは、自分の両親と将来、同居したいですか」とし、自分が結婚したあとの両親と同居についての質問であることを補足説明した。用意した3つの選択肢ごとの回答は、

- (1) したい 114人 (34.5%)
- (2) あまりしたくない 153人 (46.4%)
- (3) したくない 46人 (13.9%)
- (4) 無答 17人 (5.2%)

となり、全体的には同居を望む者は約3分の1であった。これらの回答には性差がなかったため、次の集計は男女込みで行った。

この項目の回答と祖父母に関する肯定的および否定的な反応と関係があるであろうか。前述のように、愛着に比べて尊敬の方が祖父母の生きているかどうかについて差がないので、4人の祖父母に対する尊敬の高い者を取りだすため、自己の3人の祖父母に関して「尊敬している」と回答し、残りの1人の祖父あるいは祖母について「尊敬している」、「少し尊敬している」もしくは「知らないから分からない」のいずれかの回答をしているものを取り出すと、66人がこの条件を満たしていた。これらの大学生はいずれの祖父母に対しても「あまり尊敬しない」あるいは「尊敬しない」という回答が無い者であり、全体的に祖父母に対する尊敬の念が高いと判断できよう。この66人と無答の者を除く他の247人を別の群として質問項目61を比較すると表11となった。尊敬度の高い者では「(同居) したい」の回答が過半数であるが、それ以外の者では1/3にもならず、明瞭な差となっている。また「愛着」についても同様な手続きで、祖父母に対する愛着の強い者46人を選び出し、残りの266人と

項目61の回答を比較すると、両群の差はやや縮まるが、やはり有意な差を生じていた。なお、この項目61の回答には単に祖父母との同居経験の有る群と無い群に2分して比較しても差がなく、「いやに思う」経験の回答

との関連もなかった。

### 全体的考察

大学生となっている孫は、小学生に比較すると祖父母との接触も少なく、愛着の程度も明らかに低い結果であった。また、マシューズらの結果と同じく、本研究でも大学生の現在の祖父母に対する愛着の程度は彼らの子ども頃の愛着の程度と関連していた。これは回想によるデータなので、厳密なところは縦断的調査によらなければならないだろう。米国のホジソン (1992) およびアイゼンバーグ (Eisenberg 1988) の研究では、大学生 (全員が祖父母とは別居であった) と祖父母の間の居住地が近い者は接触も多く、愛着の程度も高い結果であった。また、ドイツのシュティッカー (Sticker 1991) もドイツにおける幾つかの研究結果をまとめて、地理的な距離が孫の祖父母にたいする愛着の強さに関連していることを強調している。しかし、本研究では、大学生も小学生も祖父母に対する愛着の程度には全体的には祖父母の居住地の距離との関連は見られなかった。接触の多さについては極端に少ない者(「ほとんどあつたりしない」と回答)を除けば、愛着と尊敬の程度に関係が無かった。毎週会う者も1年に何度かしか会わない者も愛着および尊敬に有意な差はなかった。今日では一組の祖父母に対する孫の数は少なく、孫がまだ小学生くらいの年齢の時は特に祖父母もまだ元気であるので、会える機会の少ない孫に対しては楽しい出会いになるよう祖父母がサービスするからであろうか。居住地と関係があったのは「いやに思う」経験の程度であった。大学生の回答では同居している場合に特になくなっていく。接触の機会が多いと、祖父母との楽しい経験が多いだけでなく、「いやに思う」経験も増し、相殺されて愛着の程度に居住地の差が生じないとも考えられる。海外の研究で孫の祖父母に対する不快な感情を報告した研究はあまりみかけないが、ポーランドのティスコワ (Tyszkowa 1991) は高校生と大学生138人の作文の内容分析から祖父母の孫に及ぼす望ましくない影響として過保護を指摘し、また

それと反対に、少数の者が祖父母の冷めた疎遠な態度に不快な感情を示したことを記している。

今回、大学生にニューガーテンらの5個の祖父母のスタイルを示して各自の祖父母がどれくらい当てはまるか評定を求めた。同じ祖父母に対する愛着や尊敬、「いやに思う」ことへの回答とのクロス集計から、「フォーマル」、「遊び相手」、「親代わり」などが孫から肯定的な評価を受け、「家父長的」、「遠い存在」が否定的な評価を受けているとよいであろう。「遠い存在」は孫にあまり関心を持たず、愛情を示さない祖父母であろう。「家父長的」は我が国ではかつての伝統的な三世代の直系家族の中で本来の祖父母の姿であったろう。祖父は家長として、祖母は主婦権を持ち、孫の親である若夫婦よりも権威を持って直接孫の行動を規制しても当然であった。しかし、現在では、孫は祖父母からの干渉を嫌う傾向が強い。「いやに思う」こととして「干渉される」ことを挙げている者が多い。そして今回のデータでは同居している場合にそのような経験が多いという結果であった。アイゼンバーグの調査した大学生も、祖父母から「望まないアドバイスを受ける」ことを主要な不快な経験として挙げていた。「親代わり」は孫の生活に深く関与するが、孫とその親の方に祖父母からの深い関与を要請する条件が有るので、尊敬と愛着を増しているようである。そのような条件の無いときはむしろ、孫に関心と愛情を示しつつ少し距離を置き、求められなければ口出ししない（「フォーマル」）方が孫からの評価が高いようである。しかし、孫とその親に距離を置きすぎると、孫からは「遠い存在」と見られることはこの2つのスタイルの評定結果がかなり重複していることから窺える。

最後に、大学生は自分の祖父母と満足な関係を経験した場合、具体的には祖父母に対する愛着と尊敬が高い者は、そうでない者に比較して自分の結婚後に両親と同居することを希望する傾向があった。今回の大学生の回答の中に、両親との同居を希望しつつ、「二世帯住宅で」と付記してある回答も少なくなかった。今後、このような条件を詳細に検討する必要があるが、今回、一応、上述のように結論することができるように思われる。

#### 文 献

- 1) Ahrons, C. & Bowman, M.: Changes in family relationships following divorce of adult child; Grandmothers' perceptions. *Journal of Divorce*, 1982, 5, 49-68.
- 2) 浅倉昌史: 児童の悩みの実態. 皇学館大学教育学科卒業論文, 1992.
- 3) Batistelli, P. & Farneti, A.: Grandchildren's images of their grandparents: A psychodynamic perspective. In Smith, P. K. (Ed.) *The Psychology of Grandparenthood*. Routledge, 1991, pp. 143-154.
- 4) Bengtson, V. L. & Robertson, J. F. (Eds.): *Grandparenthood*. Sage Publications, 1985.
- 5) Clavan, S.: The impact of social class and social trends on the role of grandparents. *The Family Coordinator*, 1985, 27, 351-357.
- 6) Crawford, M.: Not disengaged: Grandparents in literature and reality, an empirical study in role satisfaction. *Sociological Review*, 1981, 29, 499-519.
- 7) Creasey, G. L. & Koblewski, P. J.: Adolescent grandchildren's relationships with maternal & paternal grandmothers & grandfathers. *Journal of Adolescence*, 1991, 14, 373-387.
- 8) Eisenberg, A. R.: Grandchildren's perspectives on relationships with grandparents: The influence of gender across generations. *Sex Roles*, 1988, 19, 205-217.
- 9) Fischer, L. R.: Transition to grandmotherhood. *International Journal of Aging and Human Development*, 1983, 16, 67-78.
- 10) 船越恵子・深谷和子: 高齢者と子ども. モノグラフ・小学生ナウ 9巻12号, 福武教育研究所, 1990.
- 11) Furman, W. & Buhrmester, D.: Children's perceptions of the Personal Relationships in their social networks. *Developmental Psychology*, 1985, 21, 1016-1024.
- 12) Gee, E. M.: The transition to the grandmotherhood: A quantitative study. *Canadian Journal on Aging*, 1991, 10, 254-270.
- 13) Hader, M.: The importance of grandparents in family life. *Family Process*, 1965, 4, 228-240.
- 14) Hartshorne, T. S. & Manaster, G. J.: The relationships with grandparents: Contact, importance, role conception. *International Journal of Aging and Human Development*, 1982, 15, 233-245.
- 15) Hodgson, C. G.: Adult grandchildren and their grandparents: Their enduring bond. *International Journal of Aging and Human Development*. 1992, 34, 209-225.
- 16) Hoffman, E.: Young adults' relations with their grandparents: An exploratory study. *International Journal of Aging and Human Development*, 1979-80, 10, 299-310.
- 17) 石黒彰二・酒井亮爾・許心華: 家族関係の心理学的研究 (1) 祖父母に対する青年の意識. 愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』, 1991, 5, 248-226.
- 18) Johnson, C.: A cultural analysis of the

- grandmother. *Research on Aging*, 1983, 5, 547-518.
- 19) Johnson, C. L. : Active and latent functions of grandparenting in divorce process. *The Gerontologist*, 1988, 28, 185-191.
  - 20) Kahana, B. & Kahana, E. : Grandparenthood from the perspective of developing grandchild. *Developmental Psychology*, 1970, 3, 98-105.
  - 21) Kahana, B. & Kahana, E. : Theoretical and research perspective on grandparenthood. *Aging and Human Development*, 1971, 2, 261-268.
  - 22) Kennedy, G. E. : College students' relationships with grandparents. *Psychological Reports*, 1989, 64, 477-478.
  - 23) Kennedy, G. E. : College students' expectations of grandparent and grandchild role behavior. *The Gerontologist*, 1990, 30, 43-48.
  - 24) Kennedy, G. E. : Grandchildren's reasons for closeness with grandparents. *Journal of Social Behavior and Personality*, 1991, 6, 697-712.
  - 25) Kennedy, G. E. : Shared activities of grandparents and grandchildren. *Psychological Reports*, 1992, 70, 211-227.
  - 26) Kivett, V. R. : Grandfathers and grandchildren : Patterns of association, helping and psychological closeness. *Family Relations*, 1991, 34, 565-571.
  - 27) Kivett, V. R. : Grandparent-Grandchild Connection. *Marriage and Family Review*, 1991, 16, 267-290.
  - 28) Kivnick, H. Q. : Grandparent meaning : Deductive conceptualization and empirical derivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1983, 44, 1056-1068.
  - 29) Link, M. S. : The grandparenting role. In L. Ade-Ridder & C. B. Hennon (Eds.) *Lifestyles of the Elderly : Diversity in Relationships, Health, and Caregiving*. Human Science Press, 1989, pp. 141-148.
  - 30) Matthews, S. H. & Sprey, J. : Impact of divorce on grandparenthood : An exploratory study. *The Gerontologist*, 1984, 24, 41-47.
  - 31) Matthews, S. H. & Sprey, J. : Adolescents' relations with grandparents : An contribution to conceptual clarification. *Journal of Gerontology*, 1985, 40, 611-626.
  - 32) 望月 嵩 : 老年期の家族. 正岡・望月 (編) 現代家族論, 有斐閣, 1988, pp. 148-167.
  - 33) 村井隆重 : 孫に好かれる知恵—これらの三世代家族. ミネルウァ書房, 1981.
  - 34) 那須宗一 : 老親の役割構造. 現代家族の役割構造, 培風館, 1967, pp. 169-192.
  - 35) Neugarten, B. L. & Weinstein, K. K. : The changing American grandparent. *Journal of Marriage and the Family*, 1964, 26, 199-204.
  - 36) Roberto, K. A. : Grandparent and Grandchild Relationships. In T. H. Brubaker (Ed.) *Family Relationships in Later Life*. Sage Publications, 1990, pp. 100-112.
  - 37) Roberto, K. A. : Grandchildren and grandparents : Roles, influence, and relationships. *International Journal of Aging and Human Development*, 1992, 34, 227-239.
  - 38) Robertson, J. F. : Significance of grandparents : Perceptions of young adult grandchildren. *The Gerontologist*, 1976, 16, 137-140.
  - 39) Sanders, G. F. & Trygstad, D. W. : Step-grandparents and grandparents : The view from young adults. *Family Relations*, 1989, 38, 71-75.
  - 40) 志賀令明 : 親子孫—多世代間の心理. 岡堂哲雄 (編) 家族心理学入門, 培風館, 1992, pp. 67-83.
  - 41) 総務庁青少年対策本部 : 日本の子どもと母親. 大蔵省印刷局, 1987.
  - 42) 総理府広報室 : 社会福祉に関する世論調査. 1982.
  - 43) Sticker, E. J. : The importance of grandparenthood during the life cycle in Germany. In P. K. Smith (Ed.) *The Psychology of Grandparenthood ; An International perspective*. Routledge, 1991, pp. 32-49.
  - 44) Smith, P. K. (Ed.) : *The Psychology of Grandparenthood*. Routledge, 1991.
  - 45) Strom, R. & Strom, S. : Redefining the grandparent role. *Cambridge Journal of Education*, 1983, 18, 133-141.
  - 46) Strom, R. & Strom, S. : Preparing grandparenting for a new role. *Journal of Applied Gerontology*, 1988, 6, 476-486.
  - 47) Strom, R. & Strom, S. : Improving grandparent success. *Journal of Applied Gerontology*, 1990, 9, 480-491.
  - 48) 田中幸恵, 黒田玲子, 菊沢康子, 戸谷 修 : 孫・祖父母間の交流の様態—交流の実態と交流に影響を与える要因一. 日本家政学会誌, 1987, 38, 611-622.
  - 49) Thomas, J. L. : Gender and perceptions of grandparenthood. *International Journal of Aging and Human Development*, 1989, 29, 269-282.
  - 50) Thomas, J. L. : The grandparent role : A double bind. *International Journal of Aging and Human Development*, 31, 169-177.
  - 51) Thomas, J. L. & Datan, N. : Themes of stability and changes in grandparenting. *Contributions to Human Development*, 1985,

- 14, 86-92.
- 52) Tyszkowa, M. : The role of grandparents in the development of children as perceived by adolescents and young adults. In P. K. Smith (Ed.) *The Psychology of Grandparenthood* ; *An International perspective*. Routledge, 1991, pp. 50-67.
- 53) Updegraff, S. G. : Changing role of the grandmother. *Journal of Home Economics*, 60, 177-180.
-